

キス・イン・ザ・ダーク3 ―サンプル―

1・電話

『おはようございます！ 今日昨日に引き続き、電車好きキッズと共に、駅員さんのお仕事を追跡したいと思いますす〜！』

まだ蝉も鳴き始めていない朝の七時半。普段より少し出勤の早い三崎隆司みさきりゅうじを見送るべく、北川輝きたがわかつるは遠くにテレビの音を聞きながら玄関に立った。

「行ってらっしゃい。気を付けてくださいね」

「ああ。輝も買い物に出るなら気を付けて行くんだよ」

「はい。ありがとうございます」

夏物のさらりとしたジャケットが輝の頬に触れた。しかし、輝が顔を上げるとそれは離れていく。

(あ……)

スーツのかわりに触れた三崎の手。目を閉じたまま上を向くと、柔らかなものが輝の唇を塞いだ。好きだ、と思う。穏やかで優しい三崎も、そんな彼がくれる静かなキスも。

「何かあったら電話を」

毎日繰り返し返される言葉。いつもと同じように「はい」と輝が返すと、三崎は今度は額にキスを落とすから玄関を出て行った。

三崎と住むようになって初めての夏。もう随分ここでの生活にも慣れたと思うけれど、見送るときの寂しさはなかなか耐えがたい。

しかも、輝の仕事が休みの日の寂しさはひとしおだ。胸にぽっかり穴が開いたような気分です。途中になってしまった朝食の残りを食べる。この家に来てから使うようになったテレビからは、『駅員さんのお仕事は実は二十四時間勤務も多く……』と豆知識が流れていた。

食べ終えた食器を片付けてリビングに戻ると、携帯電話が不在着信がある旨を読み上げた。

着信元は、盲学校時代からの友達である勇氣ゆうきだった。急いで折り返す。

『もしもーし』

「あ、もしもし。勇氣？」

『おはよ、輝』

電話の奥でガサガサと音がしている。

「あ、ごめん、もう外？ 今から仕事？」

『今家出るところ。大丈夫』

「ごめん、電話出られなくて」

『全然。元気だった？』

「元気元気！ 勇氣は？」

ガチャ、パタン——カチ。家を出たようだ。早めに電話を切らないと。

『相変わらずめっちゃ元気だよ』

「ねえ、今家出た？ 今日僕は仕事休みだから、

後でかけようか」

『正解。でも平気——あ、おはようございます』

どうやら誰かに会ったらしい。勇気が女性の声に挨拶を返す。

『はい、行ってきます——ごめんごめん、輝。ねえ、久しぶりに泊まりに来ない？ 来週、祝日で三連休があるでしょ？ そこでどうかなと思ったんだけど』

「あ……」

三崎と一緒に住む前だったら「行く行く！」と即答していたけれど、今は輝の独断で決めることはできない。

「えっと……一緒に住んでる人に確認してからまた連絡するね」

普通に返したつもりだったがけれど、電話の奥が無音になった。

「勇気？」

『……あ、うん、わかった』

「なるべく早く早く連絡するから」

もともと勇気とは年に数回しか行き来をしない。それでも最近は一週とずっと一緒に過ごしていたので、電話さえ疎遠になりかけていた。

（会いたいな……）

三崎のことも話したい。もしかしたら交際相手が男性やヤクザであるというところで驚かせてしまいかもしれないけれど、勇気は変なフィルター

をかけて考えるような性格ではない。それに大切な友達だからこそ、隠し事はせずに全部話しておきたかった。

（隆司さんのかっこいいところとか、好きなのころも話したいな）

また連絡するねと言って電話を切った時、つけっぱなしになっていたテレビが時刻を告げた。

「ただいま八時五十五分です」

この時間ならまだ間に合うかもしれない。輝は持ったままの携帯を操作し、愛する恋人に電話をかけた。

* * *

受付に見たことのない女を見かけた。新人だろうか。いつも立っている受付係に頷いている。

「富本、今日の午後だが——」

スケジュールの確認をしようとした時、胸ポケットの携帯が震えた。

（輝？）

電話が来るなんて珍しい。

「どうした、何かあったか」

『すみません、もうお仕事始まっていますか』

声に緊迫感がないことに安堵して、頭を下げてくる受付に軽く手を上げながらエレベーターに向かう。

「今、会社に着いたところだ。どうした」

『あの、来週の連休なんですけど、友達のところ
に泊まりに行ってもいいでしょうか』

「友達？」

もちろん輝にそういう存在がいることは知って
いるが——だめだと言えば輝はなぜだと確実に訊
いてくる。嫉妬だと言えば少しはドギマギするか
もしれないが、それで友人との関係を断とうとす
るタイプではない。むしろ信用がないのかと拗ね
てしまうことだって——。

『あの、隆司さん？ 聞こえてますか』

「家から近いのか」

遠いのなら心配を理由にだめだと言えると打算
したのだが、返ってきた言葉は遠いどころかむし
ろ今三崎がいる会社のすぐ近くの駅名だった。

『あの、ご飯とかもちゃんと作ってから行くので』
そこまで言われてしまえば大人になるしかない
だろう。

「いや、かまわないよ。友達に会うのも久しぶり
だろう。会社がすぐ近くにある。送っていいとか」

『え、そうなんですか？ でも電車さえ乗っちゃ
えばすぐなので大丈夫です』

そういえば会社の場所までは教えていなかった
と気が付いた。しかしその辺りの話は帰宅してか
らでいいだろう。

「祝日は混むぞ。それに駅からも歩くんだろうか？」

「十五分くらいですかね。でも何度も行ってますし、勇気も迎えに来てくれるので大丈夫です」

その勇気も目が見えないんだろう。しかし、対面している時ならまだしも電話口でそれを言うのは憚られた。

『帰ってから話そう』

『あ、すみません。お仕事ですよ。無理しないでくださいね』

「ああ。ありがとう」

電話を切ると、富本がわずかに口元を上げていた。

「……なんだ」

「いえ、何も」

「言いたいことがあるなら言え」

「残念でしたね」

「お前……」

端的に的確に嫌な言葉を使ってくるこの性格の悪さはどうにかならないものだろうか。普段は冷静で従順で仕事ができる有能な男なのだが、ふとした時に素の一面が顔を出す。

「せっかくの連休ですが、輝さんがお出掛けなさるのなら溜まった仕事を片付けてくださっても」

うんざりした。しかしやらねばならぬことだ。

それに富本の言うとおり、輝がいない連休など家にいたところで何の面白みもない。

ただ、それを素直に認めるのは癪だった。

「お前も出勤になるぞ」

「休日出勤手当に期待しております。……輝さん、お元氣そうで何よりです」

「ああ……」

少し前、輝はヤクザ関係のいざこざに巻き込まれた。身に危険は生じなかったし幸いトラウマになることもなく済んだが——いや、急に性に積極的になったのはトラウマの一つなのかもしれない。快楽を知ったからという理由であればよかったが、元来の無知さ故に不安を抱かせてしまった。

（何も知らないところもよかったんだが……）

「それで、結局鍼灸院の方は？」

「……お前、わかってて言っているだろう」

輝のすべてを手中に収めるべく検討していた輝の開院。しかしすげなく断られてしまった。

——僕には無理ですし、それに今の職場が好きなので。

しかも、

——あと、もう尾行……えっと、警護はやめてください。僕は大丈夫ですし、その人だって僕の警護をするために今のお仕事に就いたわけじゃないんですから。

仕事にプライドを持ち、楽しんでる輝の言葉は重かった。

本当は続行したところで、言葉で告げない限り輝にバレてしまうことはない。しかしまっすぐな

輝を騙すようなことはしたくなかった。

「警護、解除なさったと聞いています」

「黙れ、と心の中で返事をする。」

「さすがにもう輝さんに手を出すバカはいないでしょう。関西の組にも粛清の件は伝わっているようですから」

「だが、真のバカは保身さえ考えないからな」

「だから厄介なのだ。しかし、輝に嘘はつけない。」

「それなのに解除なさったんですか」富本がまばたきを繰り返した。

「……GPSはつけてある」

本当はそれさえやめようかと悩んだ。しかし一方で、それだけでは不安だ、と思う自分もいた。何かあってからでは遅いのだが……富本の言うとおりさすがにしばらくは輝が狙われることはないだろうと思っただし、その間に少しづつ三崎の立場を輝に理解してもらい、受け入れてもらうつもりでいた。

「それ、バレて捨てられないといいですね」

捨てる。それはどちらについてか、と問いたかったが、ひょうひょうと言った富本はすでに三崎の背を向けていた。三崎のコーヒーを入れるためだとわかっていても、恨み言をかわされたようで苛立つ。

三崎は半眼で富本の背中を睨むと椅子に座り、すでに重ねられていた書類を手に取った。

2・前夜

ベッドに入ってから、穏やかな時間。翌日に予定がなければ今頃はきつと肌を触れ合わせていたのだろうが、今日はきちんとパジャマを着ている。

「すみません。せつかくのお休みなのに」

大好きな三崎の腕の中で、髪を梳く手に心をゆだねる。

「かまわない。こういう時でないと泊まりには行けないだろう。俺はこうして毎晩でも輝を抱きしめていられるから」

「隆司さん……」

三崎は大人で素敵な人だ。心が広くて穏やかで優しい。

甘えるように額を胸に擦りつけると、輝のそれよりも一回りも二回りも太い腕が背中に回された。

「明日は俺も仕事になった。時間は合わせるから送って行く」

「そうなんですか？ でも車は大丈夫です。駅で待ち合わせって約束してるので」

三崎が働き詰めののが心配だった。でも泊まりの約束がなければひとりぼっちの連休を過ごすことになっていたんだなと思ったら安堵——してしまった自分が嫌になる。

「そうか」

「すごく近いんですか」

尋ねてみると、勇気のアパートからほんの数分の距離だった。その土地に慣れていない輝でも一人で行けそうなほど近い。

「なんか運命的ですね」

「そうだな」三崎が笑った気配がする。

「勇気が先に出会っっちゃわなくてよかったです」

「勇気っていいのか」

「はい」

「輝と勇気か」

三崎の指が、輝の髪を梳くように撫でる。

「ふふ。それ、学校でもみんなに言われてました。

ヒーローみたいな二人だねって」

「そうだな」

「でも怒られてばかりでしたけどね」

懐かしい。思い出すとそれだけで胸の辺りが温かくなる。

「輝が？ 想像つかないな」

「いえ、勇気が。やんちゃで元気いっぱいっていうか、間違ったことが嫌いっていうか。それでしょっちゅう他の子とケンカになって、なぜか僕も巻き込まれて一緒に怒られたりとか」

くく略くく

「えっ、すごい。どうやって知り合ったの？」

どうしよう。男性ということをどのタイミングで言ったらいいのだろう。

「えっと……去年、夏に道を歩いてたらおじいさんのこと蹴っちゃって」

「……は？ え、待って。めっちゃウケるんだけど！ 輝、外でも人のこと蹴ってんの？」

勇気はゲラゲラと笑っている。いつもこうだ。勇気はたくさん笑ってくれるから、話していても楽しい。

「蹴りたくて蹴ったんじゃないよ」

あの時のことは本当に申し訳なかったと思っている。けれどそれによって源一郎は助かったし、三崎とも出会えた。

でもやっぱりあの時……医師を呼びに行き、診察結果を聞くまでの不安や緊張感は忘れられない。けれどこうして勇気に話すとまるで笑い話になってしまう。

「そりやそうだろうけどさ、もしわざとやってるんだったら俺の手もわざと踏んだってことになるじゃん」

「そりやあ……勇気の手は半分はわざとだよ」

「やっぱり！」

二人でひとしきり笑ってから先を続ける。

「でね、そのおじいさんは熱中症で座り込んだの。それで病院の先生呼んだりして、その時にお

じいさんを迎えに来たのが今の恋人」

「じゃあ、それがきっかけで仲良くなつたの？」

「ううん。初対面はそれだったんだけど、僕が両親のお墓参りに行った時に改札でちよつと戸惑っちゃつて。その時に偶然声を掛けてくれたんだよね。それで再会したっていうか。僕はその時はおじいさんを迎えに来た人って気付いてなかったんだけど、そこから一緒にご飯とか行くようになって」

お金の関係があつたことは言わないことにした。

「へえ！　なんか運命って感じだね」

「そうかな」

運命。自分でも何度かそう思ったけれど、人に言われるともっと嬉しくなる。まるで認められたみたい。

「で、どんな人？」

「優しくて包容力があつて、年上で……鼻は僕より高いかな。性格とかはすごくかっこいい」

「甘やかしてくれる系お姉さん？」

「あ……ううん、男の人なんだ」

さらりと言つたつもりだったけれど、内心びくびくしていた。反応が怖い。心臓がドキドキして痛い。

しかし勇気は間を置かずに言つた。

「ああ、なんか納得かも」

「え？」

「なんか輝って女の人と付き合ってるイメージないんだよね」

「そうかな？」

「うん。女の人相手だと輝が疲れちゃいそうっていうか。引っ張らなきゃとか守らなきゃとかそんなこと考えて窮屈になってそうっていうかさ」

「もともと人と恋愛で付き合うって考えたことなかったからなあ……」

でも言われてみればそうかもしれない。今は三崎と過ごす時に自然体でいられている。もし相手が女の人だったら……勇気の言うとおりに、気を張り続けていたような気がする。

「そっかあ……ついに輝にも恋人ができたかあ」

「もしかして勇気にもいるの？」

「いないけど」

「なんだ！」いかにもいます！　っていう口調だったのに。「好きな人もいないの？」

「いないなあ。そこまで親しくなることがないっていうか、今つてさ、職場しか出会わないじゃん？」

「それは言ってる」

三崎とは偶然こういう出会い方をしたけれど、それがなければ輝も今頃、勇気と同じようにこれまでと変わらない日常を過ごしていたはずだ。

「それでさ——」

ヤクザだということも言ってしまったかった。

幸い男であることに違和感は抱かれなかったよう

だし、たぶんヤクザだということも言ってしまった
て大丈夫だろう。やはり勇氣にはちゃんと知って
いてほしい。

「なに？」

「社長さんなんだけど、ヤクザでもあるんだよね」
さりげなさを装ってさらりと言ってみた。しか
し、なかなか勇氣からの反応が返ってこない。

「勇氣？」

「あ……ヤクザって、あの？」

勇氣の声は掠れていた。

「どのヤクザがあるかわかんないけど、いわゆる
ヤクザって言われる人」

氣にされないだろうと思っただのに、勇氣は神妙
な声を出した。今いったい何を考えているのだろ
う。会話と会話の間が長い。

「……勇氣？」

「……あのさ、ヤクザはやめた方がいいと思う。つ
ていうかだめだよ」

「え……？」

「人を殺したりするんだよ」

「あ、それは小説の中だけだよ。映画とか、そうい
う作り物の話——」

「違う！」

「わっ！」

突然の大きな声に体が跳ねた。こんな勇氣は初
めてで、頭の中が真っ白になる。

「あ、ごめん……でも、俺、ヤクザとは付き合っ
てほしくない」

「勇気……」

「ヤクザ」とひとくくりにされるのが嫌だった。
中には悪いことをする人だっているかもしれない
けれど、それはヤクザじゃなかったって同じことだ。

けれど、勇気の言いたいこともわかった。

「……勇気、僕も最初ヤクザだって聞いた時は驚
いたよ。けど本当にすごく優しい人なんだ」

「でも——やっぱりヤクザはだめだと思う」

(あ……)

言い切られてしまい、それ以上何も言えなくな
る。しかし「はい、わかりました」とも返せず、室
内に沈黙が降る。

「……ごめん、久しぶりに会ったのに」

くく略く

「ほら、ここはなんて言うんだった？」

三崎が輝の陰茎に触れた。根元からツツ……と
上に向かって指が動き、小さな穴を塞ぐように先
端で止まる。

「あっ、はあっ……」

そこで指を動かしてほしい。撫でるように、く
るくると円を描いてほしい。

「輝」

「あっ、あっ」

覚えてる。

けれど教えられたその言葉は子どもみたいで恥ずかしい。

「忘れてしまったか」

もう一度教えようか——そう言われると寒気なんて少しも感じていないのに、体がぶるぶると震えた。

「ぬるぬるした液体が出てきてる」

「アアッ……りゆうっ……」

もう限界だった。体は三崎に愛される悦びをしつかりと覚えてしまっている。

「おち……ちっ」

喉が張り付いているかのように声が掠れた。

「ん？ よく聞こえなかった」

「あ……」

なんで。ちゃんと言ったのに。三崎が輝の言葉を聞き漏らすはずがないのに。音にならなくても、絶対に理解してくれるのに。

「隆司さんっ……!!」

首を振ると、まるで幼児に言い聞かせるかのように穏やかな口調で三崎が言った。

「輝。もう一度、ゆっくり言ってごらん」

「あ……ン」

つばを飲み込むと、ごくんとという音が鳴った。まるで飢えているみたいで恥ずかしい。けれどそ

のとおりだった。三崎からの快感に飢えている。

「おち……ちん……」

恥を忍んで口にしたというのに、三崎からの返事はなかった。言い方が間違っていたのだろうかかと不安になる。

でもそれを言葉で確認することはできなかった。そのかわり、輝の胸に触れたままの三崎の手を辿って首を通り過ぎ、頬を包むようにして顔に触れる。

「輝？」

「何も言ってくれないから……どんな顔してるのかなって」

「ああ、すまない。かわいすぎて言葉が出なかった」

「嘘……」

「本当だ」

三崎が体を動かした。どうしたんだろうと思っているとき、硬いものに陰茎を押し潰された。

「アッ……」

「わかったか？」

「わかつ……」

意識したら早くいじってほしくなっちゃった。直接的な刺激が欲しい。乳首への愛撫をねだったばかりだというのに足がもじもじと動き出す。

くく略くく

「輝、今日トイレ使っていないよね」

「使っていないよ」

「いったいどうしたのだろう。勇気の声がこわばっている。」

「どうしたの？ 大丈夫？」

「なんか……変……」

「え？」

「昨日輝が帰った後、次にトイレに入った時に戻したんだよ。少ないやつに！ なのに新しいのになってる……」

「え、え？」

「いったいどういうことだろう。」

「勇気、また忘れてるんじゃないか？」

「さすがに忘れないよ！」

「悲鳴のような声。勇気の恐怖心がありありと伝わってくる。」

「ちょ、一回落ち着こう？ もう一回整理してみようよ」

「手探りで勇気の背中に触れ、トイレから出す。居室に戻って腰を下ろし、口に出しながら順序を整理する。」

「僕が一昨日泊まりに来る前に、勇気は残りわずかなトイレトーパーを新しいのに替えておいてくれたんだよね？」

「替えておこうって思ってたけど、忘れてて……」

今はそれをそのまま飲み込むことにする。

「うん、けど僕が入ったら、新しいのになってた。で、昨日僕がここを出た後で勇気はそれをまた少ない方に戻したんだよね」

「うん。で、今日輝から後で来るって連絡をもらって、それで、じゃあ輝が来る前にまた量が残ってる方に替えておこうって思ってた、また忘れてそのままになってたはず……」

勇気の「忘れてた」が、「替えたことを忘れていた」のではなく、記憶どおり「替えることを忘れていた」のだとしたら――。

「……誰かが、この部屋に入った……？」

思わず声に出してしまった。勇気の体が揺れた気配がする。

「あっ、ごめん、勇気。でも家族は？ 合鍵持っているでしょ？」

「持つてるけど、勝手に入って勝手に物をいじって勝手に帰るようなことはしないよ！ それにトレットペーパーだけ替えて帰るなんてありえないじゃん！」

「まあ……それはたしかに」

では、いったい誰がいつ侵入したのか。

「なんで……でも記憶違いじゃないよ……」

「……ねえ勇気、一昨日と今日、家を空けた？」

「え……あ、うん。一昨日は輝を迎えに行った時と、あと午前中に買い物に行った。ほら、甘いも

の。輝と食べようって思ってたから」

「ああ……で、今日は？ ずっと家にいたの？」

「ううん、輝からの電話の前に買い物に行っただけ……でもそんなに長時間空けてたわけじゃないよ」

「買い物に行くって誰かに言ったりした？」

「まさか！ 誰にも言っていないし、時間だってそろそろ行こうかなあって感じで思い付きだよ！」

勇気は第三者の関与を排除したいようだった。

しかし自分はトイレトペーパーを替えていない、という自信もあつて落ち着けずにいる。

ふと、怖い想像が頭に浮かんだ。

「……ねえ、トイレトペーパーってさ、勇気一人だったらなくなるまで使うよね？」

「当たり前じゃん。自分で替えられるもん」

「じゃあ、他に違和感は？ 食べ物とか洗濯物とか、なんかいろいろ、家の中に違和感はない？」

「え……そう言われても……」

「今までは？ 何かおかしいなって——ねえ、リモコンが見つかからない夏って言ってたけど、あれってもしかして実際にあったこと？」

勇気から、さらりと出た言葉だったのだ。普段からそんなことがあったら怖いな、と思っていたのならまだしも、あまりにもリアルすぎた。

「あ……うん。でもそれは別に……」

少し前のことだからだろう。よく覚えていない

のか、歯切れが悪い。

「ねえ、場所が変わってたってことじゃない？
例えば、急いでいてその辺に置いてしまっ
たのが、いつの間にか定位置に戻ってた、とか」

「あ……」

どうやら心当たりがあったらしい。でも今輝の
中に浮かんでいる想像が正しかったとしたら――
不安から、つい早口になる。

「じゃあさ……もし第三者がいたとして、もし、
だよ？ もしいたとして、どうしてトイレッ
トパーパーが替えてあったんだろう？」

「え？」

もう、誰かが勇気の電話の声を聞いていた、と
しか思えなかった。しかしいつ外出するかは本人
次第。そうなると、常に室内での音を拾える環境
にあったとしか考えられない。

(盗聴器……)

カメラかもしれない。どちらにしても、そんな
ものを仕掛けられたら、勇気や輝には絶対に気付
くことができない。

「気持ち悪いけど、もしそれが善意だったとして、
どうして僕が――目の見えない人がここに来るっ
てその人は知ったの……？」

新しいトイレットパーパーの場所さえわかれば
輝だって自分でできる。でも家のようにスムーズ
にはできない。

「え、え……」

「だって、目が見える人だったら他人の家のも自分で簡単に替えられるじゃん。だから、その……」

「あ……」

輝が確信に迫ろうとした時、その声に勇気の声が重なった。

「ねえ、勇気。もしかして盗——」

「今もいる……？」

勇気の口から出た、輝よりもおそろしい想像。

しかしそれもありうるのだ、と思った瞬間、全身に鳥肌が立った。

「うわあああああ！」

どちらともつかない悲鳴。

音で、勇気も同時に立ち上がったのがわかった。

「輝！ こっち！」

「勇気！」

パニックになると、方向がわからなくなることもある。けれど勇気は輝を置いて行ったりせず、ちゃんと声を掛けてくれた。

咄嗟に白杖を握り、靴も履かずに手探りでアパートを飛び出す。

「輝！ こっち！」

大きな声だったので、それを頼りに方角を察知する。

「勇気！」

怖い。もし誰かが追いかけてきていたらどうし

よう。しかし振り返ればきっと転ぶ。少しでも早く遠くに行きたい気持ちをこらえ、人や物にぶつからないよう白杖を手早く動かす。

石のようなものが杖にぶつかり、飛んでいった。誰かに当たってしまったっていいのだろうか——しかし今、それを確認している余裕はなかった。幸い、悲鳴のような声は聞こえない。

それでもいるかもしれない被害者に申し訳なきを覚えながら足を進める。集中できていなかったせいか、何かに足を引っかけた。

「うわっ！」

〃〃略〃〃

「隆司」

「会長」

入ってきたのは源一郎だけだった。護衛は廊下に待たせているのだろう。

「輝くんの容体は」

商業 BL キス・イン・ザ・ダークの続編です。

11万5千文字。

近日発売予定です。

どうぞよろしく願います！

※なお、編集作業により販売データは本サンプルデータと一

部内容が異なる場合がございます。ストーリーは変わりません。

キス・イン・ザ・ダーク3 ―サンプル―

©goneone (イ)ーわんわん)

2022/ 9/ 28

メール:goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @goneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。